

文字はどうやって 読めるようになるの？

広く知られるようになった「発達障害」。

しかし支援や理解はまだ十分でなく、

「生きづらさ」を感じている人も多くいます。

そんな「生きづらさ」を軽減するために、

本人や家族・周囲の人はどんな工夫ができるのでしょうか。

発達障害を持つ子どもを対象に支援を行う

大阪医科薬科大学LDセンターの先生方にお話を聞きます。



みずた
水田 めぐみ 先生

大阪医科薬科大学LDセンター 言語聴覚士

言語聴覚士として、幼児期・学童期の子どもたちの言語コミュニケーションや学習の評価、指導を担当する。公認心理師、日本LD学会特別支援教育士スーパーバイザー。

大阪医科薬科大学LDセンター

言葉の遅れや認知の偏りがあるお子さんを対象に、各種検査を実施し、幼児の言語・コミュニケーションと学習姿勢の基礎作りの指導、学齢期のお子さんの言葉の指導や学習の基礎となる力を育てる指導、ビジョンセラピー、作業療法などを行っています。



みなさんは、ひらがなが読めるようになった日のことを覚えていますか？ どうやって字が読めるようになったのですか？ おそらく、この質問に答えられる人はほとんどいないと思います。私たちはどのように字が読めるようになるのでしょうか？

文字を読むために 必要な力とは

ひらがな・カタカナなどの文字学習には、小学校入学後にみんなで一斉に取り組みます。しかし実際には、生活の中で文字に興味を持ち始め、ほとんどの子どもたちがひらがなを読めるようになって小学校入学を迎えます。読みを習得するには、ことばの発達(4～5歳相当の日常会話の力や理解できることばの量)をベースに、4～5歳頃に育ってくる「音韻意識」が必要であることが分かっています。

「音韻意識」とは、「ことば」を音に分けて捉える力のことで、普段聞いたり話したりしている「ことば」が「音のつながり」できていることに気づき、ことばを作っている「音の情報」を切り離して順番を理解したり、音を入れ替えて言えるようになったりします。「音韻意識」の発達があり、子どもたちは、身近なことばを使って“逆さまことば”や“しりとり”などのことば遊びを楽しめるようになります(図1)。個人差はとても大きい時期ですが、「音韻意識」や文字の形を正しく見分

図1. ことばと音に分けて捉える力(音韻意識)とは



ける力が発達し、準備が整うと「読み」の学び時」となり、ひらがなの文字の「形」と「音」を正しく対応させ、短い期間でたくさんのひらがなが読めるようになります(図2)。

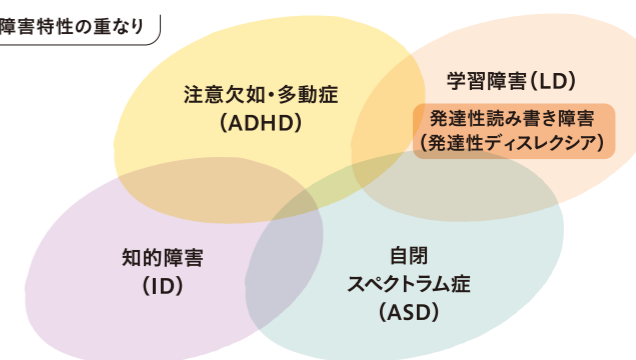
“読みのつまずき”を 見過ごさないで

小学校に入学してしばらく経っても、なかなか読めるようにならないケースがあります。この中に“発達性読み書き障害(発達性ディスレクシア)”と呼ばれる子どもがいます。これは、学習障害(LD)の中でも「読むこと」につまずきがある子どもたちです(図3)。注意欠如・多動症(ADHD)や自閉スペクトラム症(ASD)の子どものみ読みのつまずきが併せて起こることもあります。音韻意識の弱さや似た形のひらがなの見分けにくさなどがあり、文字の形と音を効率よく対応させられず「読めない」「読み間違いが多い」「読むのにとっても時間がかかる」という状態が長く続きます。文字と音がうまく対応しないので、文字を思い出して書くことも難しくなるのが特徴です。全く読めないわけではないので、「字を書くことを嫌がる」「漢字をたくさん書いて練習しても覚えられない」と相談に来られるお子さんに、読みのつまずきが見つかることも多いです。また、何度か音読する中で文章を暗記することで「読みの難しさ」をカバーできてしまうお子さんもいます。「様子を見ましょう」と適切な対応が遅れたり、「もっと頑張って」と効果が上がらない練習方法が続いているうちに、教科学習全般に遅れが生じることがあるので、注意が必要です。

図2. ひらがなの文字の「形」と「音」が正しく対応できている例



図3. 主な発達障害特性の重なり



適切な支援を するために

小学校低学年で下のチェックリストのような読むことへの難しさが疑われる場合、できるだけ早い段階から、適切な指導や合理的配慮*を実施していく必要があります。

*障害があることによって生じる社会生活上の不利益の解消・軽減に向けて、障害特性や困りごとに合わせて行われる配慮のこと。

- 幼児期に文字になかなか興味を示さなかった
- 1年生を迎える時期になっても音を間違えて話していることばがあった例)“エレベーター”を「エベレーター」、「らくだ」を「だくだ」など
- 頑張れば読めるが字を読みたがらず、読むととても疲れたようすを見せる
- 初めて読む文章で、時間がかかったり、漢字が読めなかったりする
- 大人が読んでやると理解できるが、自分で読むと内容が分からない
- 2年生になっても、特殊音節(拗音/小さな“ゃ・ゅ・ょ”、促音/小さな“っ”、長音/〇う〇)を含むことばを書き誤る
- 練習した漢字が正しく読み書きできない

“読みにくさ”を持つ人の 存在を知る

心配がある場合、まずは学級の担任の先生、校内の特別支援教育のコーディネーター、各自自治体にある教育センター、子育て支援課などに相談しましょう。読み書き・計算は、小学校の毎日の学習場面で行う活動です。保護者の方の相談内容やお子さんの学習の状態に応じて、学校内で教育的支援の必要の有無を判断し、配慮や支援が始まることも多いです。

必要な配慮・支援は、お子さんの強い能力・弱い能力、相談時の年齢やお子さんの置かれている学習環境によってそれぞれ違います。しかし、基本的には、

①通常の学級では、スムーズに読めないことで、板書や教科書の内容の理解が制限されないように配慮する(音声読み上げツールを使う、漢字にふりがながついた教科書・テストを利用する、テストの口頭回答を認めてもらうなど)

②少人数・個別指導の場で、お子さん自身の読みの力(読んで理解できる力)を、お子さんに合った方法を使って高めるという2つの視点でお子さんに合った支援計画を立てていきます。

文字を読んで理解する力は将来にわたって必要です。しかしそのつまずきは外からは見えず、読めなさへの理解・支援は十分ではありません。教室の中で人知れず学びにくさを感じているお子さんがいることを知り、読みの苦手があっても興味のあること・やりたいことに向かって学び続けられる環境や社会を目指したいものです。